

フランス語発音と会話教育のための 教科書とその附属ビデオテープ作成の 実験と成果について

松岡達也 古橋義之 堀田英毅
安藤隆之 伊藤 進

序 論

中京大学フランス語専任教員5名は1992年、共同執筆により新しい教授法を現実化する意図の下に作られたフランス語初級者用のテキストを出版し、講義に使用を開始した。(松岡・古橋・堀田・安藤・伊藤著「フランス語 ホップ・ステップ・ジャンプ」白水社)

この改訂版を発行する際(1995年)、教材の附属テープの改訂も必要となり、通常のカセットテープの吹き込みに加えて、会話テキストの部分のビデオ化も検討された。新しい教授法を考えれば、各会話シーンのビデオ映像がある事は当然と考えられる。我々は勿論出版社にその可能性を打診した。当時テキストにビデオテープを附属させ、オーディオ・ビジュアルによる教育を前面に出したテキストは意外に少なかった。(中山真彦著:「ビデオで入門フランス語」白水社 があったのみ)。出版社は当然の事だが、教材作成のさらにくわしい計画内容を要求した。我々の側には、会話部分にはイメージによるメッセージがあった方がいいという点で一致しただけで、具体的にどのような内容のビデオテープをテキストに附属させるかは未だ五里霧中であった。議論百出の後、出版社に依頼する前に、自力で一部のサンプルを作る案が浮上した。我々の作成したビデオが実用になるかどうかは疑問だが、一度作って見て、教室の現場で使った上で、本格

的なプランを決定するという案で論議の一致をみた。そこで1992年度の特定研究助成委員会に「フランス語の映像教育について」のテーマで助成の申込み計画書を提出し、承認された。我々がどのような実験的ビデオテープ教材を作る意図を持ったかについては「中京大学視聴覚センター紀要, 第2号, 1993年3月刊行」にすでに発表してある。今回, それに続いて実現した現地でのビデオ制作の現実と完成後の問題点について報告する。

注 本稿は上にも述べた如く1992年度中京大学特定助成委員会の助成金による研究活動の報告である。

第1章 会話テキストとそれに付属させるシチュエーション提示用のビデオテープについて

本学フランス語教員の共同作成テキスト「フランス語 ホップ・ステップ・ジャンプ」は3部からなっていて, 第1部が発音編, 第2部が表現編, 第3部が文法と練習編の3部からなる。この第2部がいわゆる会話練習のパートであり, 本書の特色はこの2つの部分にある。第3部は学生が多少なりとも容易に辞書が引けて, 次年度の読本の訳読の入門が楽になるよう手助けをするための付録に過ぎない。発音練習にこれだけ多くの時間を充てる必要があるかという異論は勿論ある。が今回はそれには触れず, 第2部の会話部分の教材のみを問題として提示する。テキストの全部をここにあげることは無駄であるので, 一番典型的なビデオによるシチュエーションの提示が有効と思われるシーンを取りあげる。

例1. 買物

1. Un kilo d'oranges, s'il vous plaît. — オレンジを1キロくださいな。
Très bien. — 承知しました。
2. Qu'est-ce que vous désirez? — 何がお入りようですか?
Je veux une robe rouge. — 赤いドレスがほしいのですが。
3. C'est combien? — おいくらですか?
Cent francs. — 100フランです。
C'est cher! — それは高いわね。

例2. 道順

—Pardon, Madame, comment faire pour aller au musée du Louvre?

—C'est assez loin d'ici. Il faut bien une heure à pied. Prenez le métro. Vous avez la station de métro un peu plus loin. Vous allez jusqu'au carrefour et vous tournez à droite. Vous continuez tout droit. La station est à votre gauche.

—Merci beaucoup, Madame.

—Il n'y a pas de quoi.

—すみません。ルーヴル美術館へはどうやって行くのですか?

—ここからはだいぶ遠いですよ。歩けばまるまる1時間はかかるでしょう。地下鉄にお乗りなさい。もう少し遠くに駅がありますよ。四つ角まで行って右に曲りなさい。そしてまっすぐ行くんです。駅は左側にあります。

—ありがとうございます。

—どういたしまして。

例3. カフェで

Paul: Quelle chaleur! J'ai très soif. Monsieur, s'il vous plaît!

Le Garçon: Bonjour. Qu'est-ce que vous prenez?

Paul: Je voudrais une bière. Un demi, s'il vous plaît.

Jean: Moi, j'ai faim. Je prends un jus d'orange et un sandwich au jambon.

Le Garçon: Bien. Tout de suite, Messieurs.

ポール: 暑いなあ。喉が渴いたね。ボーイさん, すみません

ボーイ: いらっしゃい。何にしますか。

ポール: ビールがいいね。小ジョッキを下さい。

ジャン: 僕は腹がへった。オレンジ・ジュースとハムサンドにします。

ボーイ: しょうちしました。すぐお持ちします。

語学教師なら誰でも, 会話には現地に居る気分になるようなシチュエー

ションを提示する教材が必要だという事を知っている。そして学生を誘導して外国で外国人と話す気分させたいとも考えている。

我々もイメージのつけられた会話テキストの作成という夢には弱かった。プロが作るビデオとは異なった、もっと身近で生々しい現実の映像がついた教材を学生に提示出来ないか—その可能性を探るのが我々のテーマとなった。

我々は上に示したテキストに加えて、いくつかの小さいスケッチのシナリオも用意した。それはテキストよりも短く簡単で、もっとやさしい会話となっている。その一例を示す。

例2. 道順の応用テキスト

—Comment fait-on pour aller au Louvre?

—Vous allez tout droit, vous traversez le pont et tournez à gauche.

Le Louvre est là.

—ルーブルに行くにはどうしたらいいですか。

—真っすぐ行きなさい。橋を渡って左に廻りなさい。ルーブルはそこにあります。

ビデオカメラはホームビデオカメラのカテゴリーに入るソニーのハイエイトカメラ CCD-TR 705 を2台用意した（1台は個人の私物で故障の際の予備）。それにライトと指向性マイクを持参した。会話のテキストはあっても映画用のシナリオが必要である。映画用シナリオを教員の一人が作成した。

問題はフランス人のアクター2人が必要な点である。フランス語の教員の一人が演劇界に通じていて、コーディネーターをつとめる事になった。そして現地での映画監督も兼ねることになる。他に一人がカメラを廻す役、一人がマイクを持って録音する役になった。撮影隊は三人の最少人数で出発することに決定した。期日は10月で一週間パリ滞在。メンバーは松岡、古橋、安藤。ビデオの撮影の経験者は安藤のみ。不安な出発であった。

第2章 ビデオ教材フィルム製作の現場での問題点

計画が計画通りに行かないのはよくある事だが、我々もひどい計画違いに遭遇する事となった。作って行った計画書は全面変更を余儀なくされた。パリは、行って見ないと、事が予定通りに行われるかどうかわからない町である。我々はビデオに出演してくれる二人の演劇部の学生クラスのアクターを、コーディネーターを通じて出演依頼していた。だがパリに着いて、当方のコーディネーター役の先生に入った連絡によれば、二人の学生俳優の出演はキャンセル、その代り出演出来るのは中年の中堅俳優一人のみという事である。予定は全く狂った。

我々が、ビデオを製作する事を予定しているシーンは、すべて二人の登場人物の対話から成り立っている。一人の名優だけではどうしようもない。討論のあげく出た案は、一人分は我々教員が出て、登場人物の片方を務める案であった。プロの役者と素人の教員の対話のアンバランスは、やって見るまでもなく目に見えている。我々は製作者としてフランスまで行ったので、俳優となる決意はしていない。結局、「ここまで来た以上、プランは実行せねば」という一言で、全員俳優として交代で出演となった。俄か俳優とプロの俳優の演技の差は誰の目にも明らかであった。

製作の環境も最悪だったと言うべきだろう。

俳優の都合で、製作の日取りが我々の滞在予定とうまくマッチしなくなった。我々はパリについたら、出来る限り早く会話のシーンの撮影を始め、その残りの日は、ストーリーに関係ある町のあちらこちらを撮影して、あとで接ぎ足すというプランを持っていた。だから会話シーンの撮影を先にすます予定だったが、それが俳優の都合で後になり、しかも二日間に限られた。これでは肝心の会話部分の撮影が苦しいスケジュールになることは避けられない。

10月のパリは日が落ちるのが早い。しかも曇り日が多い。実質使えるのは午前中と2時までの午後位である。雨が降ったら、それももう一日中暗く、イメージを悪くする。どんな悪条件の日でも、2日で撮影を完了しなければならない。これはフランス人の中年俳優にも、我々素人俳優にとっ

ても悪戦苦闘の二日だった。我々のセリフ間違いによるNG続出、撮り直しの連続に加えて、原因不明のアクシデントが、二日間の混乱に輪をかけた。どうしてか知らぬが、2日目に撮影に入る前に、前日撮った分を確認した所、何と前日撮ったビデオが消去されて何も映っていない。もう終わったと思ったのに、始めからやり直し撮影には全員ゲッソリした。これを頑張っただけで最後まで撮り直したのは、「せっかくここまで来てやり出した以上は何がなんでもやりとげる」という意地以外の何物でもない。

我々を悩ませたもう一つのものは、騒音で埋った町の中で、会話を録音するという事の困難さである。それは実は出発前から予想されていた。我々がビデオを撮る事を予定していた場所は、パリの中でも第一級のやかましい場所である。ソルボンヌの正面の通り、サンジェルマン・デ・プレの教会前の広場、サントノレ通り等だが、どれもバスとオートバイの騒音で埋っている場所である。だから、ビデオの資材の中に、我々はカメラに付属のマイク以外に、別に設置する指向性マイクを用意して行ったのである。そして一人がそれを手に持って、撮影中はカメラの視野に入らなくて、最も出演者に近い所で立っているという計画だった。フランス人役者が二名から一名になったおかげで、日本人の一人が相手役にならねばならなくなったせいで、マイクの持ち手が居なくなった。そこで指向性マイクをカメラに取り付けるだけの対策しか取れなくなった。これでは騒音の中から出演者の声を明瞭に拾うことは困難だろう。結果は予想通りだった。声は騒音の中に埋もれていた。我々が体験したのは予想以上の現場での音採りの難しさであった。帰国後の編集作業の中で、会話の部分の音を何とか改善する方法を考えねばならない。ビデオ撮影の予想以上のトラブルと困難の一週間を体験した後、我々は何本かのテープを後生大事に抱えて帰国した。

第3章 「フランス語 ホップ・ステップ・ジャンプ」という 教科書全般の構成の問題点

ビデオ作成の件と共に、我々フランス語教員の中で問題になったもう一つの事がある。それは、この教科書を一部分の改訂のままで、いつまで継

続して全クラスに使用するかどうかであった。教科書というものも一定の寿命がある。古風で使うに耐えない教科書というものが事実存在する。そこまで古くなっていなくても、現在の大学生の状態からすれば、同じ教科書を二年続けて使う事は、好ましくない現象が起る。今の学生は教科書を買う金を惜しみ、書き込みが沢山ある先輩の教科書を貰いたがる。

非常勤の先生が特に、学校が定めた教科書を毎年使うことを嫌う傾向がある。同じ教科書は新しい発見がないので講義をする方が退屈になり、教える気力が抜けて来ると言う。それは事実かも知れない。新しく使う教科書の場合だとその内容が未知であり、教育メソッドも異なる故に、それを使って教える側も、緊張して下調べも一生懸命に行う。同じ教科書だとその努力を怠り、下調べなしでいきなり講義に出る事もあり得る。だからテキストは一年限りで、次年度は新しい教科書を使うのが理想であるかも知れない。

なのに何故、毎年同一の本校制定テキストを使うのか、どこにその存在理由があるかを考えて見なければならぬだろう。それが発見されねば、非常勤講師の人々の不満の声に答える事は出来ない。

もし我々専任教師が、非常勤講師諸氏の疑問に答えるとすれば次のような理由づけしかない。我々は、我々の新しいフランス語教育の実験をしている最中なのである。今の学生は外国に興味を持たず、外国語を習得したいという意欲もない。そのくせ今の学生は小学校の頃から、親に連れてもらって、我々教師以上に外国に行っている。もはや外国文化に未知のものは少なく、外国とは、毎日のテレビのコマーシャルが流し続けているようなルーティーンの文化が容易に見、体験出来るレジャーのための土地でしかない。

「外国語は勉強せずとも、ちゃんと外国には行けるし、日本語で買物ならどこの国でも出来る。何故今どき苦勞して外国語を習い、下手な外国語をしゃべる教師の授業に出なければならないのか。」

これが大学生の大部分が、口では言わなくても体で表わしている考え方である。英語だって彼らの考えは明瞭である。「英語は日常会話さえやってくれりゃいいんだ。何故英文学のテキストを読まなけりゃならんのだ。」

この彼らに何を教えるというのか。もはや従来通りの文法を教え、古典

を訳読する外国語の講座が彼等の望むものではない事は確かである。とすれば現在の第2外語と呼ばれる外国語教科書の大部分は現代離れた、役に立たない学問のための教科書である。最近のテレビのコマーシャルの馬鹿の一つ覚え的キャッチフレーズ、「現代人のニーズに答える」ような教科書とは、どんなテキストなのだろうか。

我々は、この「現代のニーズに答えるテキスト」を作る夢に賭けたのだ。しかし「現代のニーズ」というものの実体は、甚だ不明瞭なもので、見きわめる事は困難である。買い手が本当に持っているニーズではなく、売る方が宣伝で作り出しているニーズではないかと疑いたくなる物がいくらかある。学生のニーズもこれに類する。マスコミが、「これが新時代の傾向だ、世の中はこういう風に未来は進化する。」と言うと、本当にそうと思ひ込み、大学も進化した時代に対応した学問を、即時に教えこんでくれることを期待する。彼等のニーズが正当か否かは不明瞭だが、大学教育側も学生のお望みに即応するというのも考えものである。大学教育は、スーパーがお客の好みに即応して商品を並べ変えるように変化させるわけにはいかない。学術研究も時代によって流行の先端の分野というものはある。だが学術研究のすべてがそこに集中するというのは考えものだ。それは単眼の学者と学術を育て、単細胞の国民の文化を作り上げることになる。そんな事にならないように、我々は大学教育が即時に、一方的に雪崩をうって変化する事は止めたいと思う。何事もやり出したことには、或る程度の時間の持続が必要だ。やり出してすぐ止めるのは、学問の世界では避けなければならない。やめるにはやめるだけの理由を明らかにしなければならない。我々が全員で作りに出した教科書を、途中で改訂しながら5年あまり使い続けて来たのは、そのような理由と言えるのではないか。我々は我々の発案した教育メソッドの有効性を確かめてから、次の段階に入りたいと考えた。その作業を終ったら、もう少し進化した形の教育法に基づく語学教科書に移行する。それまで十分な討論を行い、資料テープ、ビデオ等の副教材を作成しておく。

現在の共同編集の教科書の不満な点もほぼ明らかになりつつある。一番はっきりしている事は、もっとはっきりしたタイム・スケジュールに従って教材を配置しなければいけないという事である。その一例は、発音練習

を前期全部を使ってやる必要があるか、会話の部分はこれで足りるのか、文法の復習はこれほど長く多量の説明を盛り込むのが必要か等の疑問に解答を出すことである。こうした具体的な問題の討論を終った上で、我々のテキストは全面的改訂による再出発という事になるだろう。その時期はもう来ていると考える人があっても不思議ではない。今後も、全専任教員の共同編集テキストを全クラスに使用することによって、本学のフランス語教育の特色を出したいと考えるならば、テキストの全員による改訂は、もうそんなに待てない時期に入ったと言えよう。

第4章 語学教育における映像テキスト使用に関する受講生の 意識調査と分析

(1) 趣旨と調査経過

中京大学では全国の大手の大学同様、1年次の学生は週2回の授業を受けている。多くの大学では一方を「文法」、他方を「購読」という形で進めている。しかし「文法」も「購読」も同じ内容であることが多い。とりわけ大きな大学では同じ教員が担当することはなく、また担当教員の間で意思の疎通がないことも多い。この弊害を克服するために、分業を明確にして学習における重複を、避けると同時に、相乗効果のあるテキストの採用が必要である。他方、未修外国語の学習にあっては発音が軽視される傾向がある。また「文法」の教育方法は担当教員により多様であり、一つの方法で統一することは出来ない状況がある。そこで週2回の授業であること、また週一回は「文法」の教育があること、クラス人数40人から50人、オーディオテープ使用という前提で中京大学の実状に合った実践的教科書の執筆を行ったものである。これは成功を収め、全国的にも評判を呼んだ。

他方、近年映像を使った教材の開発が進んでいる。学生からのニーズもあるようである。そこで中京大学フランス語教室では実験的に映像テキストの制作を行うことにした。その成果の上に立って、次ぎなる教科書の制作に向かうことに方針を固めた。

実験に使う映像テキストは、『ホップ・ステップ・ジャンプ』の第二部「表現編」をベースに作成した。その内容は「あいさつ」salutations「自己

紹介」 presentation, 「道を聞く」 demander le chemin, 「パリ散策」 promenade en Paris, などである。実験には「あいさつ」と「自己紹介」のみを使用した。

豊田学舎, 名古屋学舎で三クラス, オープンカレッジで一クラスを選び実験を行った。

これをもとに分析を行い, 過去三年間の研究会成果を一括して発表するものである。

(2) 調査方法

対象: 任意の一年次学生 (三クラス) 並びに中京大学オープンカレッジの社会人クラス

時期: 学習が表現編に入る 11 月 (学園祭明け)

時間: 90 分

展開:

- ビデオ教材学習をはじめる前に, 一般論でその効用について受講生のアンケートを実施する (10 分)。
- ついで, ビデオ教材スケッチ 1 を見せる (10 分間に 2 回)。
- スケッチ 1 の解説と学習 (20 分)。
- 再びスケッチ 1 のビデオを見せる (5 分)。
- 同様にしてスケッチ 2 を見せてから活字学習を行い, その後再びビデオを見せる。
- 最後に効用に関する具体的アンケートを実施する (10 分)。

(3) 名古屋学舎, 豊田学舎並びに中京大学オープンカレッジにおけるアンケート結果

1) 質問事項その 1

質問 1 映像テープによる教科書は学習効果の点で活字だけの教科書より有効だと思う。

質問 2 映像テープによる教科書は学習効果の点でオーディオテープのテキストより有効だと思う。

質問 3 あなたが望むのは活字だけの教科書よりオーディオテープによる

教科書である。

質問4 あなたが望むのは活字だけの教科書より映像テープによる教科書である。

質問5 あなたが望むのはオーディオテープによる教科書より映像テープによる教科書である。

質問6 外国語の効果的学習にはクラス人数が学習効果に関係すると思う。

質問7 外国語の学習を有効にするには、50人クラスは多すぎる。

質問8 適正なクラス人数は次のどれでしょうか。○を打って下さい。

質問9 映像テープによる教科書を有効に使うには、50人クラスは多すぎる。

質問10 (9)で(はい)あるいは(どちらかと言えば、はい)と答えた人のみ回答して下さい。映像テープによる教科書を使う場合、適正なクラス人数は次のどれでしょうか。○を打って下さい。

名古屋学舎

	yes	rather yes	no	incertain
質問1	14	4	0	3
質問2	12	5	0	4
質問3	3	6	5	8
質問4	6	7	2	6
質問5	9	7	1	4
質問6	10	7	2	2
質問7	10	4	4	3
質問9	7	5	6	3

	less than 10	11 to 20	21 to 30	31 to 40	41 to 50	more than 50
質問8	4	6	7	2	1	0
質問10	2	5	5	0	0	0

豊田学舎

	yes	rather yes	no	incertain
質問1	28	20	3	6
質問2	31	16	4	7
質問3	13	20	10	15
質問4	31	12	4	11
質問5	29	17	1	12
質問6	21	11	11	13
質問7	24	9	11	12
質問9	18	11	14	13

	less than 10	11 to 20	21 to 30	31 to 40	41 to 50	more than 50
質問8	4	16	18	11	8	1
質問10	3	12	11	3	0	0

オープンカレッジ

	yes	rather yes	no	incertain
質問1	13	3	0	0
質問2	12	4	0	1
質問3	6	6	4	1
質問4	10	3	3	1
質問5	10	3	1	4
質問6	13	3	1	0
質問7	15	1	0	0
質問9	11	4	1	1

	less than 10	11 to 20	21 to 30	31 to 40	41 to 50	more than 50
質問8	9	7	1	0	0	0
質問10	2	10	3	0	0	0

2) 質問事項その2

質問11 『ホップ・ステップ・ジャンプ』(オーディオ併用)より効果的である。

質問12 (はい)あるいは(どちらかと言えば、はい)と答えた人のみ回答して下さい。

その理由として次の中に該当するものがあれば、番号に2つだけ○を打って下さい。

1. テキストが映像と一緒にであると、表現の使い方がよくわかる。
2. テキストが映像と一緒にであると、オーディオだけの学習より覚えやすい。
3. テキストが映像と一緒にであると、楽しく見られるのでやる気である。
4. 映像の中にフランスの町や風景の中で出てくると、習った表現に親しみが持てるので覚えようという気になる。
5. 映像の中に日本人が出てくると、自分が使う場合が想像できて便利である。

質問13 (いいえ)と答えた人のみ回答して下さい。

その理由として次の中に該当するものがあれば、番号に2つだけ○を打って下さい。

1. テキストが映像と一緒にであっても、覚えやすいということはない。

い。

2. テキストが映像と一緒にあっても会話は音声の問題であるから映像がより効果的ということはない。
3. 映像使用のテキストは補助的效果はあっても基本は活字による学習が重要である。
4. 映像だと楽しいがそれ以上のことはない。かえって覚えにくいとすらある。
5. 映像を使ったロールプレイであれば、効果的だが、見るだけでは仕方がない。
6. 今回のものには工夫がない。もっと工夫すれば効果があると思う。

名古屋学舎

	yes	rather yes	no	incertain
質問 11	3	9	0	6

	yes + rather yes	no
理由 1	4	0
理由 2	6	0
理由 3	3	2
理由 4	8	0
理由 5	0	2
理由 6		0

豊田学舎

	yes	rather yes	no	incertain	no answer
質問 1	11	11	12	22	1

その理由	yes	rather yes	no
理由 1	6	7	2
理由 2	3	4	4
理由 3	3	1	4
理由 4	8	5	0
理由 5	0	2	3
理由 6			5

オープンカレッジ

	yes	rather yes	no	incertain	no answer
質問 11	11	11	12	22	1

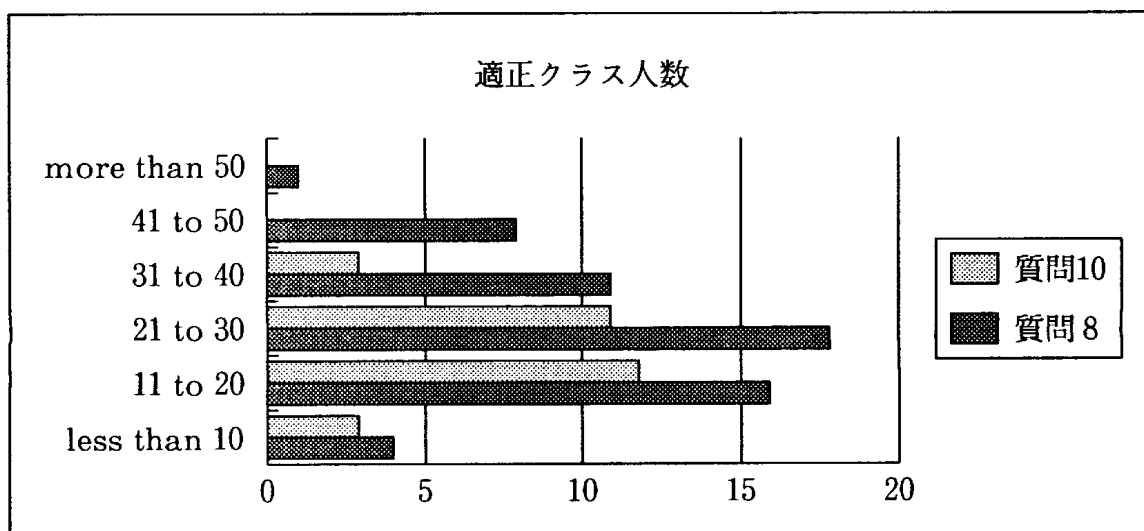
その理由	yes	rather yes	no
理由 1	6	7	2
理由 2	3	4	4
理由 3	3	1	4
理由 4	8	5	0
理由 5	0	2	3
理由 6		11	5

質問 12, 13 は回答者少数のため統計を行わなかった。

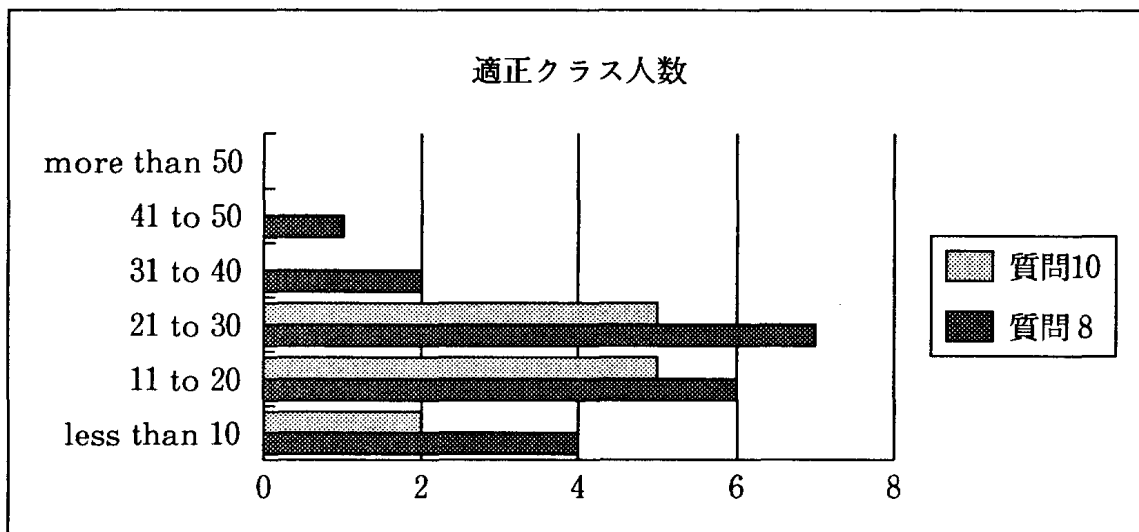
3) 適正クラス人数

映像を使用する場合のクラス人数はどの程度が適当なのか。当事者である学生とオープンカレッジ受講生に聴いてみた結果、音声教材を使う通常のクラスでの適正人数と映像教材を使うクラスでの適正人数はピークがずれていることがわかる。音声教材を使う通常のクラス人数については、20～30人が適当と考えているが、映像クラスの場合にはそれより少ないクラス数を適当と考えているようである。反面、社会人はその逆の印象を持った。

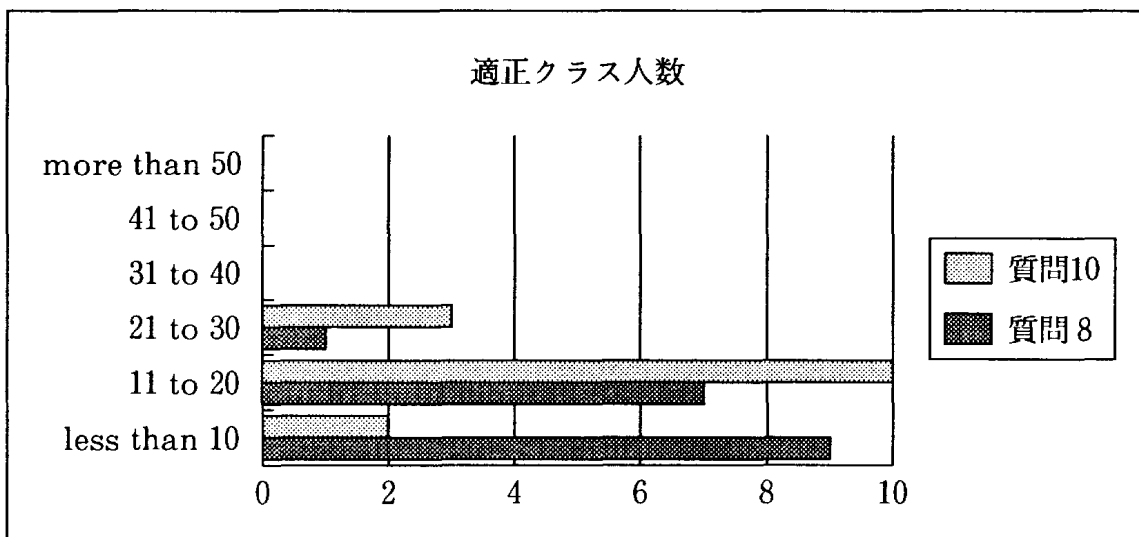
名古屋学舎



豊田学舎

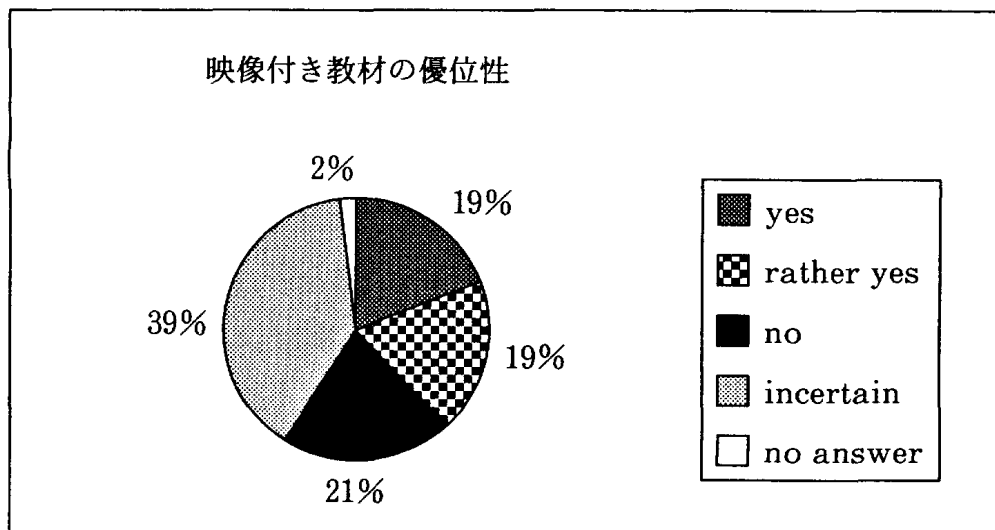


オープンカレッジ

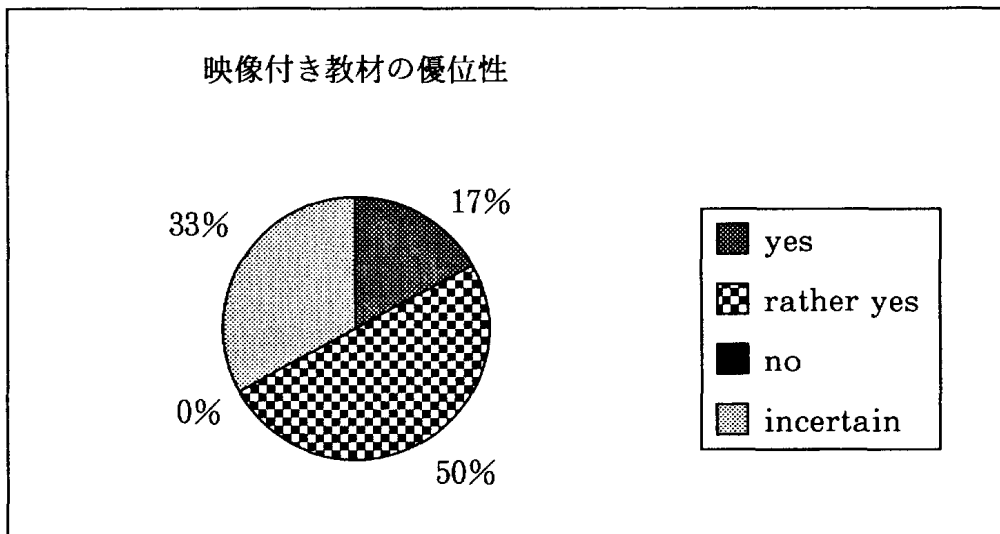


4) 実験ビデオを使った後のアンケート

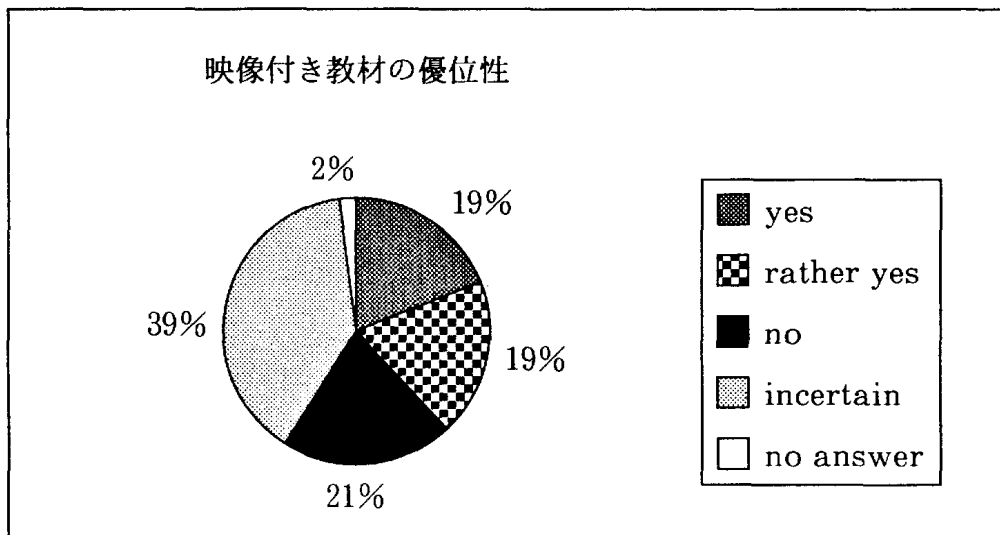
名古屋学舎



豊田学舎



オープンカレッジ

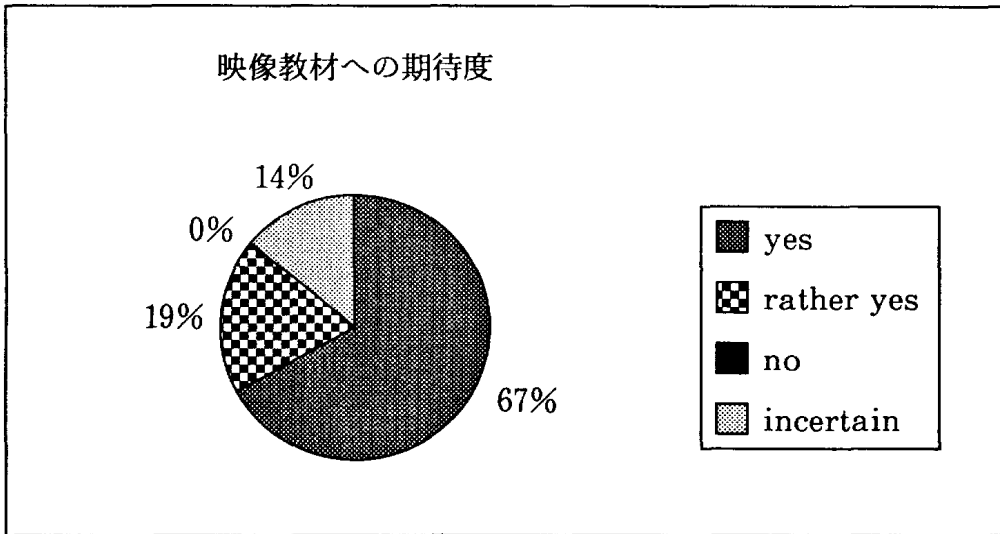


(4) 収集データの解説並びに分析

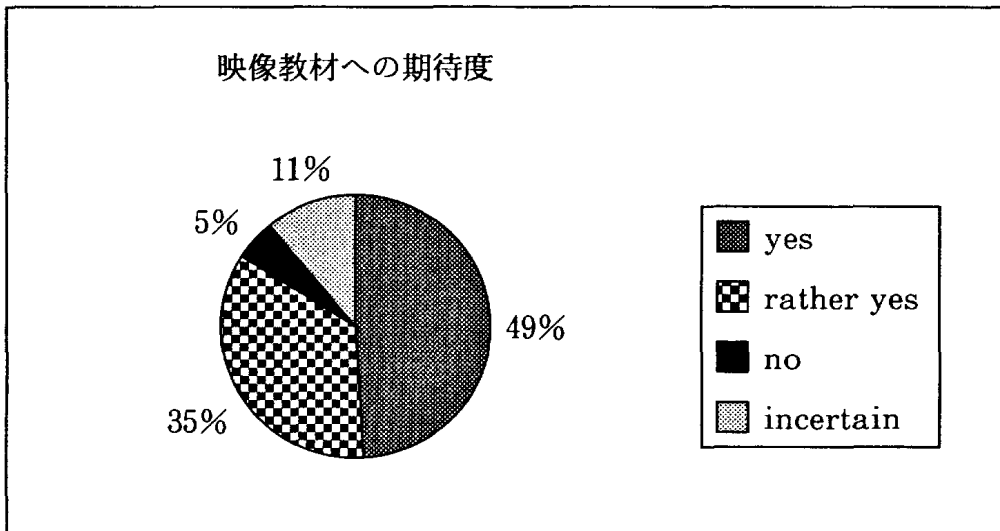
1) 映像教材付きテキストに対する学生並びに社会人の一般的印象

下記に見るとおり、圧倒的な期待がある。名古屋学舎では86%、豊田学舎では84%、オープンカレッジの社会人クラスでは100%の受講生がその効果を信じている。映像時代は確実に到来していると言えるだろう。今後の語学教科書はこうした期待に対応する必要がある。

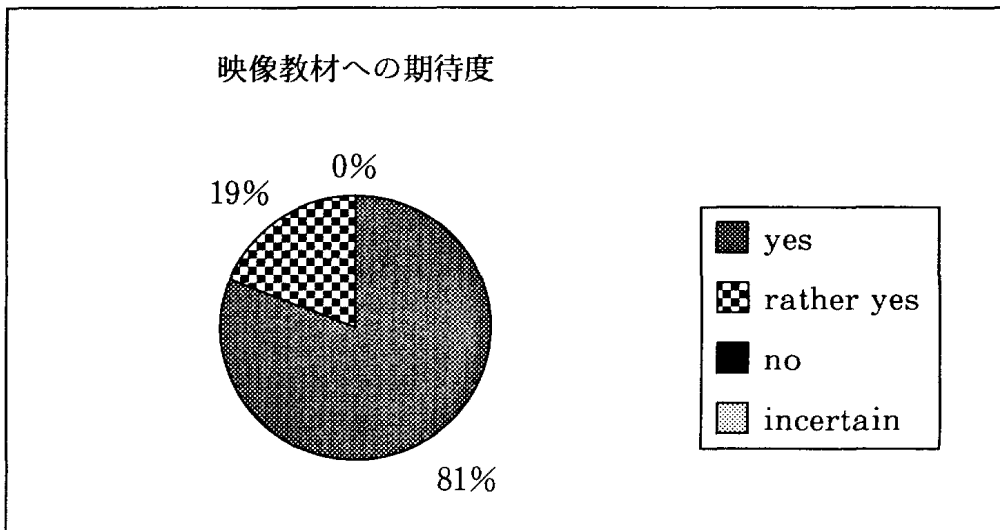
名古屋学舎



豊田学舎



オープンカレッジ



(5) まとめ

- 1) 映像テキストへの期待は大きかったが、実際に実験した後では後退する。この現象の説明として、外国語の表現学習にあっては映像教材は補助的であって大切なのは目の前の先生と学生の関係があって初めて効果を上げることが自覚したようである。
- 2) その際重要なことは、同時にとったアンケートが示すように、適正クラス人数は圧倒的に20人前後がよいという見解を持っていることである。現行は50人以上の環境で教育が行われている。これにどのように対応したらよいのか考えねばならない。アメリカでは10人が常識であり、フランスでは20人で行われている。日本の大学の語学教育を改善するには何よりも物理的な基本環境を改善する必要があることを教えている。
- 3) 実験映像テキストを否定的に判断した学生たちは解決方法として「ロールプレイ」の導入を強く支持している。映像でロールプレイを導入するということは、独習の場合にのみ有効である。これを教室で効率よく実現する方法とは、先生と学生が少人数クラスで実践的な Substitution 練習（一種のロールプレイ）を行うことである。しかし現行の教育環境では不可能な方法である。映像教材を導入することにしても、物理的教育環境が大きな障害になっていることがわかる。

以上分析の一部を紹介しながら映像テキストによる語学教育の改善についてフランス語教育での議論の一端を紹介した。今後は、工夫した映像テキストを作成して物理的教育環境を設定して学習の効果を比較することが必要である。